

「ヤグラタケ (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「ヤグラタケ」を「寄生菌」と記述しているキノコの案内書があるが、それは誤りである。「腐生菌」というのが正しい。そのことは、実際にヤグラタケの発生状況を観察すると理解できる。



ヤグラタケは、一般的なキノコとはちがって、決して地面からは発生しない。ベニタケ科のキノコ「クロハツ」と「クロハツモドキ」の子実体を菌床とする。写真はやや古くなったクロハツだが、傘の中心部が凹んでいて、そこに雨水がたまることが多い。すると菌体が柔らかくなり、腐敗が一気に進む。



翌日には、子実体は崩れ始め、虫（主としてキノコムシやカマドウマなど）が食い荒らすので、次第に原形を留めないほどボロボロになる。この時期にはすでに自身の胞子の拡散は終了していて、子実体は役目を終えて死んでいると言える。その「ヤグラタケ」の胞子がつき、発生を始めるのだ。



クロハツは、アカマツを囲んで「輪生」することが多い。1本のクロハツにヤグラタケが発生すると、あとから生えたクロハツにも、次々とヤグラタケが見られるようになる。



最初はこのような白いマッシュマロのような塊で、キノコには見えない。虫が喰ったあとも見られる。



しかし、クロハツが完全に腐って、ヤグラタケのほうが成長してくると、傘を開くようになる。傘の裏側には「ヒダ」もあるが、ほとんどの胞子は傘の上部が粉末状になって、そこで形成される。ヤグラタケにも虫がたくさん来るので、恐らく胞子は虫によって別のクロハツに運ばれるのだろう。